

富山県立山町
金剛新遺跡
緊急発掘調査概報

1975年3月

立山町教育委員会

発刊にあたって

立山町は、万世の昔より雄大な立山連峰の山々に見守られ豊かな自然と歴史的風土に育まれてきた町であります。このため数多くの文化財が今も残されており、古くから遺跡の宝庫として周知されておりました。

しかし、近年経済の高度成長を背景に波及しつつある地域開発の波がこの地にも押し寄せ、昔からの豊かな自然や文化財にかってない危機をもたらしております。

今回、春と夏に実施いたしました金剛新道跡の調査もこのような状況のもと、県からの補助金交付を得て行なわれたものであります。調査に御参加下さったみなさまの不断の努力により多大なる成果をおさめ終了いたしました。

ここに、その成果の概要をまとめ今後の文化財への理解と保護の一助になることを願うと共に、今回の成果が暑さに負けない中学生・高校生の熱心な働きと、県教育委員会・地元関係各位の全面的な協力によるものと感謝し、心から厚くお礼申し上げます。

昭和50年3月

立山町教育委員会

目次

発刊にあたって

例　言

I 地形と周辺の遺跡……………

1 本書は昭和49年8月5日から同年8月31日まで緊急発掘調査を行った富山県立山町金剛新道跡の調査概要である。

II 調査に至るまで……………

2 調査は昭和49年度県費補助金の交付を受けて、立山町教育委員会が主催し、富山県教育委員会の指導と、富山農地林務事務所・立山中部土地改良区の協力を得て実施された。

III 調査の概要……………

3 調査は調査団を編成して行なわれた。調査団の構成と参加者は次のとおりである。

1 調査の経過と層序……………

調査団長石原与作（立山町文化財保全調査委員長）、調査委員安田良栄（立山町文化財保全調査委員）、富山県教育委員会橋本正、山本正敏（以上調査担当者）、城西大学生松本幸治、立正大学生呂昌子、静岡大学生松井和幸（以上調査員）、地元渡辺勝久、福みづ子、土井タニエ、渡辺サエ、秋元よしえ、秋元スミイ、富山県立新川女子高等学校生徒山口忍、富山県立雄山高等学校生徒柏紀子、谷川聰、鷲内初枝、西野俊秋、森中誠、大田和正、船木昇、松原孝司、黒川利明、野崎郁雄、吉川知明、中川明彦、富山県立上市高等学校地歴部、中学生沢田正行61名。

2 道　標……………

事務局は立山町教育委員会におき、秘書課長舟橋季喜が担当した。

3 遺　物……………

4 調査期間中渡辺勝久氏には長期間にわたり調査事務所の提供を受けた。また本書の作成にあたって富山考古学会小島俊彰、酒井重洋の両氏には有意義なる指導と助言を得た。記して謝意を申し述べる。

a 遺物式上器……………

5 本書の写真撮影は山本が行い、遺構・遺物の実測原図は山本・松本・松井が作成した。

b 石　器……………

6 今回の執筆は文化課神保孝造と山本が行い、各々の頁は各章末に記した。

c 石　器……………

d 中世末～近世初期の土器……………

e 上器実測図……………

f 土　製品……………

g 石　器……………

h 中世末～近世初期の土器……………

i 上器底部拓影……………

IV 調査の成果……………

参考文献……………

回版目次

回版第1 金剛新道跡

回版第2 縄文時代前・中・後期の土器

回版第3～第6 縄文時代後期後葉の土器

回版第7 縄文時代晚期の土器

回版第8 石器

回版第9 その他の遺物

I 地形と周辺の遺跡

金剛新遺跡は、富山県中新川郡立山町金剛新字東江添7番地に所在する（第1図）。

この地域は、常願寺川によって形成された扇状地の基部にあたり、みごとな段丘状地形が発達している。

遺跡は、このような段丘状地形の一つで、常願寺川扇状地東縁段丘中、最も下流に形成された「上段段丘」の西側にあり、立山町の中心都市五百石より東南へ2.5kmの水田地帯である。遺跡の標高は、約77mを測り、西側へ40mには次の段丘との崖線があって、遺跡の西端を示している（安田他1974）。

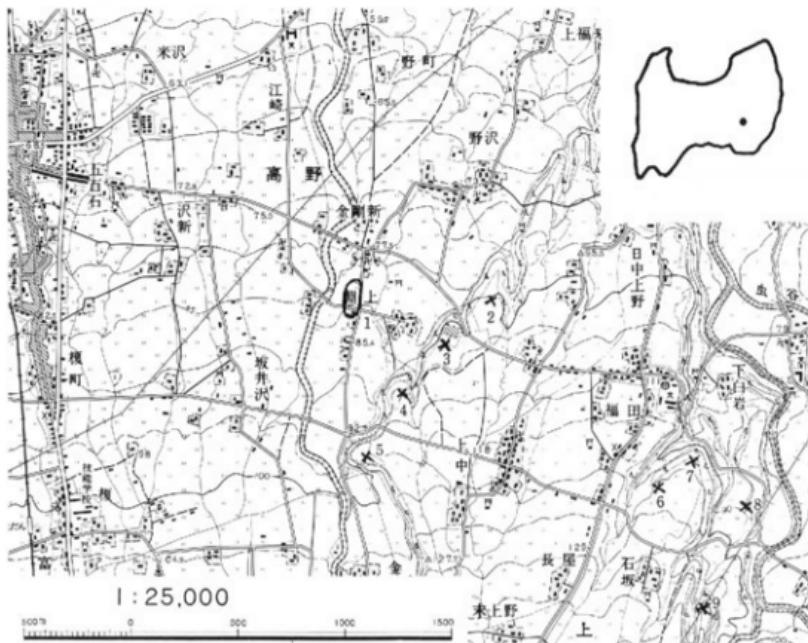
金剛新遺跡周辺の遺跡としては、付近一帯が遺跡の立地に絶好の地であるため数多くの遺跡が知られる。特に最上位の段丘に立地するものとして、吉峰（先土器・繩文中期・晚期）、天林北（繩文早期・中期・晚期）、天林南（繩文前期・中期）遺跡がある。いずれも遺跡の規模が大きいこと、遺物が豊富なことで古くから著名である。（神保）

II 調査に至るまで

金剛新遺跡の発見については、明らかではないが、時おり金剛新地区内の水田から耕作などの際に繩文時代中・後期の遺物が発見されていた。その後、ひごろ立山町一帯の遺跡の究明に努力されている安田良栄氏らの丹念な採集調査により金剛新遺跡として世に知られた。

昭和49年金剛新地区一帯に立山北部地区県営は場整備事業が実施された。この事業は、段丘地形で入り組んだ小面積の水田を区画整理して大型化するもので、事業が進行すれば遺跡の破壊は免れないものであった。これを知った立山町教育委員会は急遽調査団を結成し、安田良栄氏の指導のもと昭和49年3月27・28日の両日發掘調査を行なった。しかし、発掘調査の規模が小さかったため、県教育委員会と連絡をとり、県費の補助金を得るとともに県教育委員会の指導を受けて、昭和49年4月28日～5月31日の試掘調査、同年8月5日～8月31日には本調査を実施した。

（神保）



第1図 地形と周辺の遺跡

III 調査の概要

1 調査の経過と層位

調査は昭和49年4月に立山町教育委員会が実施した試掘調査結果にもとづいて、 $100\text{m} \times 100\text{m}$ のグリッドを組み、 $2\text{m} \times 2\text{m}$ の発掘区を単位として開始した（第2図）。

まず最初にX 15及びX 25列において道路を東西に横切るように発掘区を設定し微地形と遺物包含層の状況把握を行った。その結果、Y 20列附近をほぼ南北に走る低い崖線の上にそって細長く遺物包含層がのびていることが確認された。Y 26列附近から東側と、崖線の西側の一級低い水田では再堆積の遺物などが若干みられるだけであった。

次に遺物包含層のみられる地点に対し、2～4区おきに発掘区を設定していき、その内でも特に遺物の集中している発掘区を中心にその周囲を拡張していく方法をとった。

遺物の量はかなり多く、縄文時代後期後葉のものが主体的であるが、同前・中・晩期や中世末～近世のものも出土している。遺構はX 10 Y 24区で小型の穴が一基発見されただけである。

縄文時代前・中期の遺物はX 30列附近から北側に分布するがこの区域にはプレハブの飯場が建ち並び、また一部駐車場となっているためほとんど調査できなかつた。

X 30列附近のすぐ北側は一級低い水田面となり、試掘でもほとんど遺物の出土をみていないことから、遺跡範囲の北端をX 50列附近にもとめられる。遺跡は道路をはさんで南側にも広がっている。昭和48年度には場整備事業が行なわれ、土器・石器が発見されているが、工事はすでに終了してしまっており、正確な範囲はつかめない。



第2図 地形及び区割図 (1 : 1,500)

層位は比較的単純な様相を示しており、第Ⅰ層暗灰色土（耕作土）・第Ⅱ層黃色土紋を含む灰褐色土（水田底土もしくは撒入土）・第Ⅲ層黒色ないし黒褐色土（遺物包含層）・第Ⅳ層褐色土（シルト質層）に区分できる。第Ⅱ層は鉄分をやや含む水田底土にあたる層を何枚かはきむ場合もあり、川直し等を数度にわたって行ったと考えられる。第Ⅲ層はさらに非常に黒味が強くしまりのある第Ⅲa層とやや明るい第Ⅲb層に分けられる。遺物は主として第Ⅲa層と第Ⅲb層の上部に包含されていた。

遺跡全体に礫が多く、時には一かえもある石が出土するため発掘作業は困難をきわめた。炎天下にもかかわらず、歓喜的な努力をしてくれた中、高校生諸君のおかげで総計380m²を発掘して8月31日に調査を終了した。

2 遺構

本遺跡から検出された遺構としては、穴が1個確認されている。

穴は、発掘区の南部（X10, Y24）より検出した。

形状は、直径約80cmの円形で、断面はU字状に掘られる。穴の深さは、地山面（褐色土）より約25cmを測り、その底には多数の円礫が見られる。この円礫の配置については特別の意図が認められない。恐らくは、付近一帯が常願寺川によって形成された崩壊地に当るため、その礫層の一部が表われたものと思われる。

穴の覆土は、黒褐色土であり、その埋まり方は、この穴が一時期に埋まつた状態を示している。また覆土内には、風化した礫と上部に若干の小土器片が含まれるが、穴の所属時期を決定するようなものはない。

この穴の用途については、その形状により貯蔵用の穴を考えたいが、前述したように決める手となるような伴生遺物がないため、現在のところ性格不明の穴としておきたい。

（神保）

3 遺物

遺物量は非常に多く、時期的にも縄文時代前期から晩期までの土器、石器と中世末ないし近世初期の土器が出土している。

a 縄文式土器

前期後葉の土器（図版第2上-左上）

細い粘土紐を器面に貼りつけて、その上に連続爪形文を密に施す土器がX50Y27区から出土している。前期後葉の福浦上層式（高畠1965）に比定でき、細片ではあるが、金剛新造跡の始まりを考える上で重要なである。

中期前葉の土器（図版第1、図版第2上-同下左）

細い半截竹管文で器面を飾る土器は新保式（高畠1965）かもしれない。

第4図1の土器は、頭部から上はやや外方に開きぎみに立ち上がる頸部以下は変化のない単純な器形の深鉢形上器である。斜縞文を地文とし、頭部から上に半截竹管文を縦横に配する文様が展開される。口唇部にはうす巻状の小突起が一ヶ所につけられていて、その直下に細い粘土紐を貼りつけている。突起の下とやや離れた両側の三ヶ所には半截竹管文を（h）字状に引いている。（h）字状の文様は三ヶ所のみと考えられ、土器の片面に集中しているので、突起のあり方とも考えあわせると土器の正面といすべきものを意識した文様施文となっている。

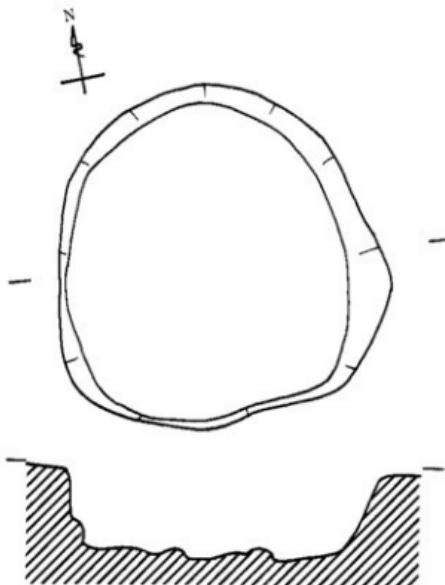
その他の文様としては、半截竹管文で区画した内部に格子目文や連続刺突文を施文するものなどがある。図版第2上の上段中央の土器は口縁部に動物意匠の突起を有している。

以上の土器群は市上山田式（小島1974）である。

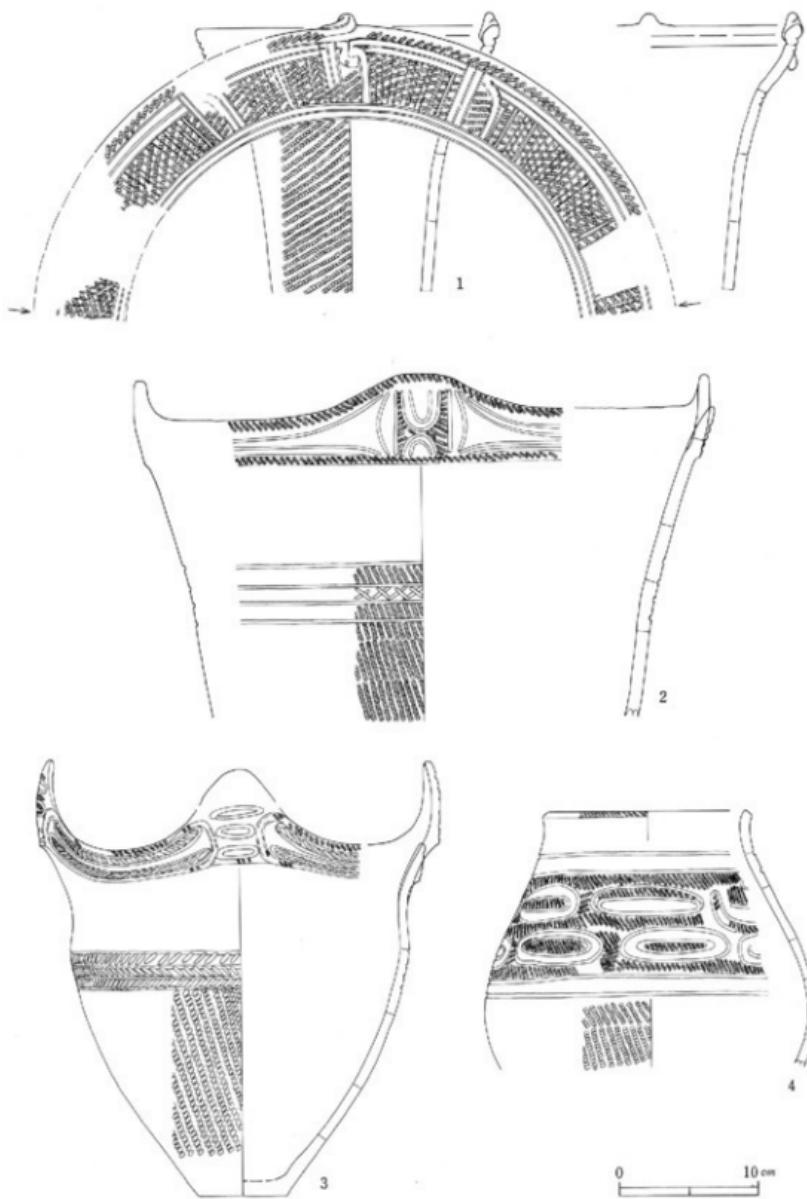
中期中葉の土器（図版第2上-1）

連続した爪形文を押す隆起線と半截竹管文でうす巻文様を施文する土器は天神山式（漢、広田、大谷1959）に比定されるであろう。

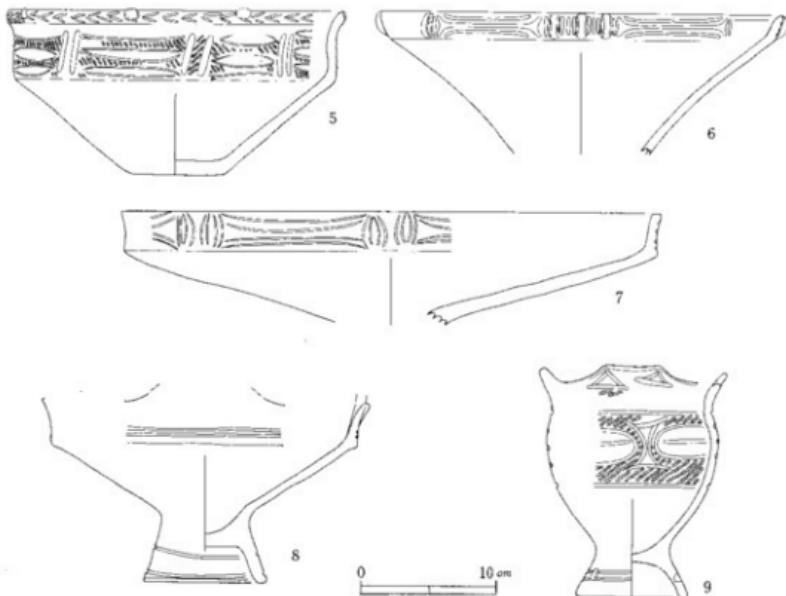
中期後葉の土器（図版第2上）



第3図 穴実測図 (36)



第4図 土器実測図 (34)



第5図 土器実測図 (34)

口縁部に隆起線を貼りつけて、その上に貝殻腹縁による刺突を施す土器は串田新I式〔小島1964〕と考えられる。

後期中業の土器（図版第2下右）

波状口縁の鉢形土器で、文様は沈線で区画した内部を羽状繩文で埋めている。口唇部には小突起がつく。東日本の色彩の強い土器で井口I式〔小島1966〕に比定できる。

後期後業の土器（第4図2～4、第5図5～9、図版第3～第6）

金剛新遺跡の主体をなす土器で量が多く、復元できるものもかなりある。文様で飾られる土器には、深鉢形土器・鉢形土器・壺形土器・浅鉢形土器・注口形土器・蓋などの器種があり、一応のバラエティーはそろっている。なお鉢形土器・浅鉢形土器には台の付くものが多い。これらの土器の文様には各種のものがあり、さらに細分される可能性もあるうかと思われるが、十分な整理が済んでいない今、一括してあつかっておく。

次に各器種ごとに代表的なものをいくつか紹介する。

深鉢形土器（第4図2・3）

2： 波状口縁で、外方へ開く胴上部が肩で段をつけ、やや直立する口縁部がつく器形である。文様は三段構成となる。口縁部には沈線による弧線を組み合せた文様を配する。すなわち波頂部には短い弧線を主として縦方向に組み合せ、波頂部間にには両者をつなぐように長い弧線を3～4本引いている。胴上部は無文帶で、胴中央は繩文をこらがした上に数条の沈線をめぐらし、さらに沈線間を一ヶ所削消して斜格子状に短い沈線を引く。肩と口縁部上端には胴部のものとは異なる細い繩文を施している。

3： これも波状口縁で肩にゆるい段をもち、三段構成の文様となる。口縁部の文様帯は、波頂部には横円形の区画をして、そのうちの一部には内部に矢羽根状の沈線を引く。波頂部間に最も非常に長い横円形の区画をして、内部に矢羽根状の沈線を引いている。胴上部は無文帶となる。胴中央には沈線がめぐり、その間を矢羽根状の沈線で埋めており、胴下部には繩文が施される。口縁部には一部に細かな繩文がみられるが、胴下半と異った原体である。

その他に、口縁部と胴上部に沈線による弧線を数本づつ引き、瘤を貼りつけるもの（図版第5上一左）、同じく縦長の三角形のえぐりを入れ、えぐりの間を数本の沈線でつなぐもの（図版第5下一左）、波頂

部に連結三叉文風のえぐりを有するもの（同図版一右）などがある。

鉢形土器（第5図9）

卵形の胴部に外反する波状口縁と台が付く。胴部は楕円形に区画して内部に沈線を引く文様がくり返される。楕円形区画間と波頂部には三叉文が配される。脚部の穴は貫通せずに途中でとめてある。

壺形土器（第4図4）

4： 球形の胴部で、短い口縁部がわずかに立ち上る器形となる。文様は胴上部に二重の楕円形区画が二列にめぐらし、胴下半には纏文がみられる。二重の楕円形区画の内部と外部及び口唇部には纏文が施されるが、これも胴下半とは異なる原体である。胴上部の文様部分には丹もしくは朱塗の痕跡が残っている。

浅鉢形土器（第5図5～8）

底部に台の付くものとつかないものがある。文様は口縁部と脚部にかぎられる。

5： 二本組になった浅く太い沈線を底に8ヶ所引き、その間を弧状あるいは楕円形に区画し、一部に纏文を埋めている。口縁直下には矢羽根状に沈線を施し、偏平な瘤を貼りつけている。

6： 縦方向に短い粘土紐を三本一組として一周に8ないし6単位貼りつけられる。縦の粘土紐間に連続状の三叉文が施されている。これも台が付くと考えられる。

7： 口縁部に短い縦の弧線と長い横の弧線を組み合せて文様を構成している。8単位になるとを考えられる。口縁部に丹もしくは朱塗がみられる。底部は現存しないが、器形のカーブと類似から台がつくと考えられる。

8： 口縁は波状を呈するもので、肩の部分と脚部には沈線がめぐる。

いずれにせよ、浅鉢形土器の大部分は口縁部に縦方向の粘土紐を貼る場合は三叉文もしくは数条の平行沈線でつなぎ、縦の弧線の場合は横の弧線でつなぐという基本的なパターンを有する。ほとんどが台付であることを共通点として指摘できる。

注口形土器

球形の胴部で、注口部の下部に盛り上りがみられる。文様は楕円形の中に沈線を引くモチーフを用いるものと、平行沈線をめぐらして、その間に刻目を施すものなどがある。

蓋

図版第6下一上段中央に示してある。二重の三角形の区画を連結したもので、頂部で交叉させている。直径11cmを計り、つまみはつかない。

晩期前葉の土器（図版第7上）

器種がわかるのは波状口縁の深鉢と口縁がやや内屈する鉢で、量はそれほど多くない。文様は三叉文が主体だが、いわゆる玉抱き三叉文となるものは勝木原式（小島・出崎1967）に比定できる。

晩期中葉の土器（図版第7下）

器種としては口縁部がくの字形に外方へ開く鉢形土器が多く、その他に壺（図版下段左）・浅鉢形土器（同中段右）などがある。いずれも比較的薄手の作りで、焼成も割合良い。

鉢形土器の文様は、沈線で鋸歯状あるいは入組状に区画し、細かな纏文を埋めるものや刻目・押し引きの列点文などで飾る。口唇部には特徴的な小突起がつけられている。

蓋には入組文と列点文が、また浅鉢形土器の口唇部には短い粘土紐と纏文が施されている。浅鉢形土器には2個並んだ貫通孔がみられる。

これらの土器群はいわゆる中層式（沼田1956）の中に含まれられるが、その中でもやや新しい要素をもつと考えられる高岡市中川遺跡の土器群（倉田1930）に類似する。

晩期後葉の土器（図版第7下一右下）

丹もしくは朱塗の楕円形土器で、胴部上半を棒状具による沈線文様で埋めている。

粗製土器

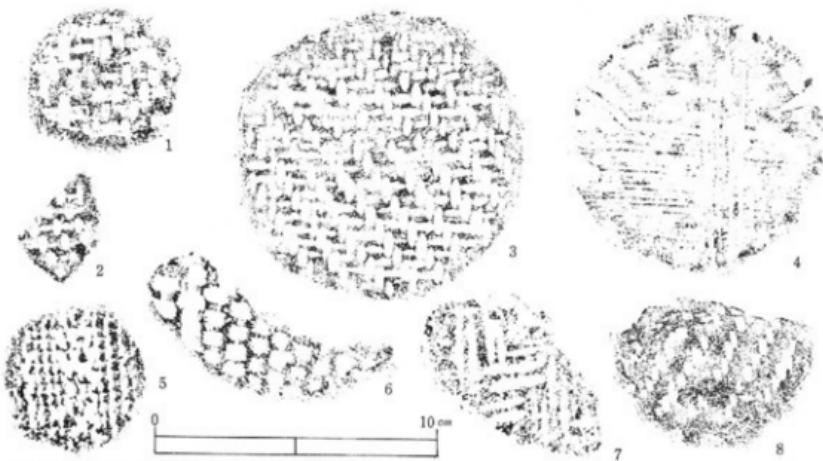
器形の変化が少く、口縁が直立する深鉢形土器が多い。ほとんどが纏文を施すものであるが条痕文（図版6下右）もある。条痕文土器は晩期に下るもので、中でも口縁部に指頭状の圧痕を有するものは晩期後葉に伴うものかもしれない。

土器底部の圧痕

土器の底部には種々の圧痕文がみられる。18例について観察を行ったところ、幅広の葉を十字に組み合せた圧痕（第6図4）が4例の他はすべて絶対度である。荒木氏の分類（荒木1970）に従えば、1の型式（同6）が1例、2の型式（同3）が4例、3の(イ)の型式（同7）が2例、11Aの型式（同2）が2例、11Bの型式（同1）が1例、12Bの型式（同8）が1例、42の型式（同5）が3例である。これらは後期後葉～晩期と考えられる。

b 土製品（図版第9上）

土器片を円形に整形して中心に穴を穿つものが一点出土している。非常に風化しているが、メンコの仲間と思われる。その他に中心に貫通する穴をもつ球状土製品が出土している。量は少い。（山本）



第6図 土器底部拓影 (3)

c 石 器 (図版第8～9上)

金剛新造跡からは土器と共に多数の石器が出土している。そのうち量的に多いものとしては、石刀・磨製石斧・擦石・凹石が上げられる。又、特に目を引くものとしては石冠・独鉛石がある。

石器は、いずれもI～III層中から出土し、その所属時代は、一部のものを除けば大半が縄文時代後期後葉のものである。

石刀は、完形のものではなく、先端部や側面破片であり、出土遺物中最も量が多かった。砂岩系の石材を磨き、断面を偏平梢円形に仕上げている。

磨製石斧は、大小二種があり大型のものには、偏平なものとすんぐりとしたものが認められる。両者とも蛇紋岩や砂岩系の石材を用いている。

擦石は、偏平な円錐の側面を利用しているが、片面を使用するものと両側を使うものがある。又、これと組み合って使用された石皿の出土量も多い。いずれも砂岩系の石を使用している。

石冠は、円錐の端部が円錐状に磨かれるもので、その用途を暗示させている。

独鉛石は、長梢円の礫の中央部に抉りを入れ、全体に磨きをかけるが、ところどころに調整痕が残る。あるいは未完成品かもしれない。

その他、石器としては石鎌・石錐・打製石斧・石錐・石棒・石鋸・石ランプ・砥石・垂飾品がある。しかし、上記のものに比べて量的には少ない（この傾向は、石鎌・打製石斧に目立つ）。

この内で、垂飾品として、ひすい型の玉や蛇紋岩製の块状耳飾があり注目される。（神保）

d 中世ないし近世初期の土器 (図版第9下)

量的にはあまり多くなく、遺跡全體に散在していた。図版中右上の一例は天目風の小皿で中国製品と考えられる。左側の3点は内面におろし目のある鉢と皿の底部で、越前焼である。他の多くは越中瀬戸焼と考えられる。器形のわかるものは少いが、鉄釉を施し、削り出し高台を有する皿や、灰釉でつけ高台を有する碗などが認められる。その他、伊万里焼と思われる磁器も出土している。

越中瀬戸窯は本遺跡の南西3.5kmにあるが、学術調査の手はまだほとんど加えられていないために不明な点が多い。なお、本遺跡から中世の日常器物の中心的存在であった珠洲焼が全く発見されていないことは注目すべきであろう。（山本）

註① 該期の半截竹管で能る土器について、胴下半が直線的に底部につながる場合は文様が頭部より上に集中し、胴下半がふくらんで底部がすさまる形態のものは胴部にまで施文されることが小島俊郎氏によって指摘されている（小島1973a）。第4図1の土器は前者の例で規則に合っている。

註② 他に宇奈月町愛本新造跡で出土している（瀬・竹内1971）。

註③ 12Bの型式は絃3本滑り、2本趙え・縁3本趙え、2本滑りで左1本逆りとなるもので荒木氏の分類には入っていない。第5図5の土器である。

註④ 出土石器の内、大型の石錐・石ランプ・块状耳飾は、縄文時代前期に位置付けられる。このうち石ランプは、立山町吉峰遺跡において以前より注目されており、今回同様のものが検出された。

IV 調査の成果

金剛新造跡の発掘調査における最大の成果はなんといっても縄文時代後期後葉の質・量とともにすぐれた土器資料を得られたことである。從来、富山県の該期の土器型式としては井ノ口II式（小島1966）が設定されており、興東地方ではそれに対応して貼り瘤文土器が知られている。そのあと晩期に至るまでの間には、型式設定まではいっていないが、平村ともむら遺跡（高田・淡1965）・富山市岩瀬天神遺跡（出崎1968）出土の土器群が置かれている。これらの土器群は資料的制約もあり、充分な検討はなされていない。¹⁰⁾

しかし、近年該期の好資料を出土する遺跡がいくつか発掘されて光実してきており、本遺跡もそのうちの一つに数え上げられる。各遺跡とも土器の多くはまだ整理途中であるが、セットもほぼつかめるまでになっている。また東・西日本の接点としての地域性の問題も明らかになりつつあり、成果の一部はすでに発表されている〔小島・四柳1973b〕。

以上の状況をふまえ、本遺跡の後期後葉の土器群について一瞥してみると、地域化されてはいるが、西日本的な要素を持つものが日立つようである。浅鉢形土器の大部分がそうであり、深鉢形土器でも三角形のえぐりを入れて沈線でつなぐ土器や、口縁部に弧線を三叉文風に組み合せた文様を有する土器などその中に含まれる。

以上の様な土器の他に、橢円形の区画を多用するグループがある。深鉢形土器・壺形土器・台付鉢形土器・浅鉢形土器などとおりの器種がそろっている。深鉢形土器には西日本の要素を持つ土器と共に通する点も多いのであるが、この群の一部には貼り瘤文がみられる。深鉢形土器で、橢円形の区画をし、瘤を貼りつけるものは本江広野新造跡に好資料がある。

先に上げた三角形の切り込みを有するものや、口縁部に弧線を組み合せた三叉文風の文様を有する、西日本の要素を持った土器群には貼り瘤文が全くみとめられないことから、橢円形の区画を多用し一部に貼り瘤文がつけられる一群とは時間差を考えられるかもしれない。

しかし、東・西日本の接点として不安定な地域性を考えると、種々の要素の混在したあり方と考えることもでき、速断はさしひかえておきたい。貼り瘤文自体の形状も乳頭状・十字の刺み・二の字形の刺みなどバラエティーがあることから、時間的に幅を持つ可能性もあり、また該期に客体的な存在であるいわゆる新地式などに非常に類似する東北的な土器のあり方とも合せて、今後の検討を必要とする。

器種のセットは、いわゆる粗製土器の類を別としてほぼ出そろっているが、中でも特に壺形土器の出土は特筆に値しよう。球形の胴部に短く立ち上る口縁部のつく器形の壺形土器は、高岡市勝木原遺跡の晩期前葉のものに好資料があり〔小島・出崎1967〕、その初源をさらに後期後葉にまでさかのばらせる点、今回の新たな発見として成果の一つに加えておく。

（山本）

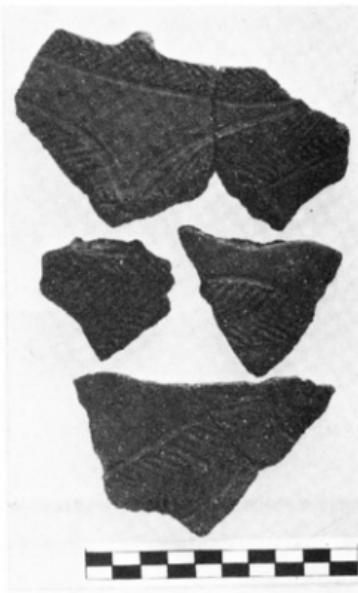
註① 宇奈月町愛本新造跡〔淡・竹内1971〕・滑川市と上市町にまたがる本江広野新造跡〔小島1972〕などがある。

参考文献

- ア 荒木ヨシ1970「東日本縄文時代後・晩期の綱代編みについて」物質文化第15号
- ク 斎田一郎1930「越中國高岡における石器時代遺跡」人類学雑誌第45巻第一5号
- コ 小島俊彰1964「高岡公園小竹藪縄文遺跡」高岡市教育委員会
- 小島俊彰1966「東崩波郡井口遺跡出土遺物の紹介」大境第2号
- 小島俊彰・出崎政子1967「勝木原（1）」高岡T・亞高校地歴クラブ
- 小島俊彰1973a「富山県滑川市・上市町本江・広野新造跡調査概報」富山県教育委員会 滑川市教育委員会 上市町教育委員会
- 小島俊彰・四柳嘉章1973b「北陸（富山・石川）の晩期遺跡」日本考古学協会第40回大会研究発表要旨
- 小島俊彰1974「北陸の縄文時代中期の編年——戦後の研究史と現状——」大境第5号
- ク 高坂勝喜1965「縄文文化の発展と地域性」「日本の考古学II」河出書房
- 高田善太郎・凌翼1965「平村下梨・こもむら遺跡調査報告書」富山県東崩波郡平村教育委員会
- 出崎政子1968「北陸地方の縄文時代晩期について」大境第3号
- ミ 漢慶・大谷清瑞・広田秀三郎1959「天神山遺跡調査報告書」富山県教育委員会 魚津市教育委員会
- 凌翼・竹内俊一1971「愛本新造跡調査概要」富山県下新川郡宇奈月町教育委員会
- ヤ 安田良栄・佐伯令蔵・女川米次郎・松岡宗次1974「立山町日暮の段遺跡調査報告書」立山の文化第25号

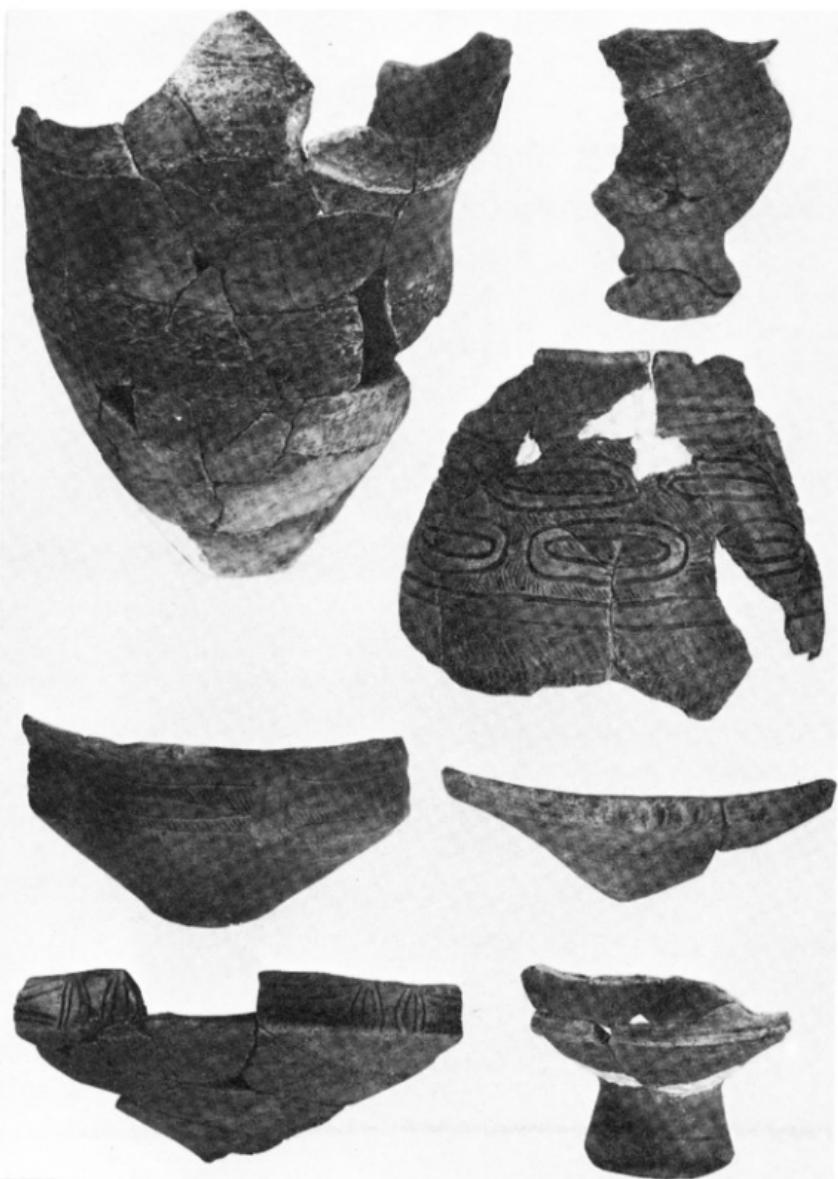


図版第1 上 発掘区全景 下 1.遺構（北西より） 2.六
3.4.出土状況



図版第2 上 縄文時代前・中期土器
下左 縄文時代中期土器(1)

下右 縄文時代後期中葉の土器



図版第3 繩文時代後期後葉の土器(3分)



図版第4 新石器時代後期後半の土器



図版第5 繩文時代後期後葉の土器



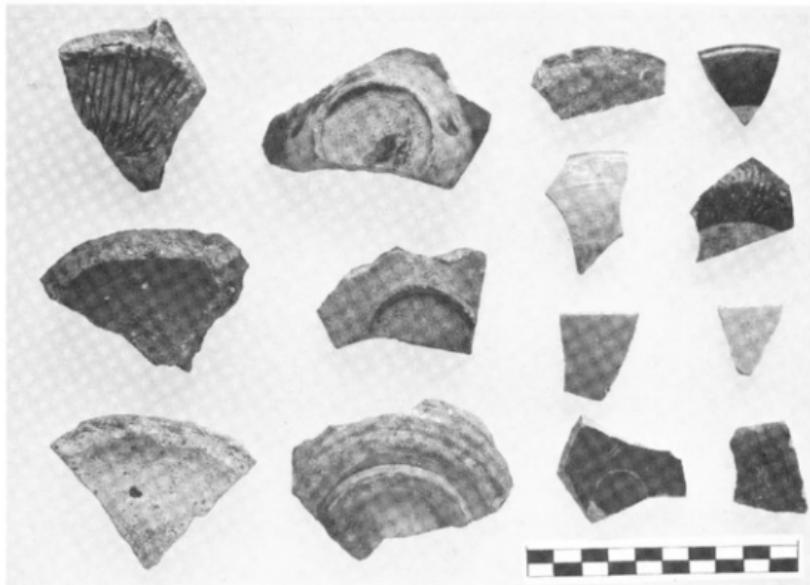
図版第6 繼文時代後期後集の土器



図版第7 上 縄文時代晩期前葉の土器
下 縄文時代晩期中葉～後葉の土器



圖版第 8 石器



図版第9 上 石器・土製品
下 中世末～近世初期の土器

富山県立山町

金剛新遺跡緊急発掘調査概報

発行日 昭和50年3月31日

発行者 立山町教育委員会
編集者

印刷者 富山スガキ株式会社